自己啓発本は読んではいけない

代表取締役会長　鈴木英介

そもそも「自己啓発本」とは何か。早速ウイキペディアで検索してみると「人間の能力向上や成功のための手段を説く…スピリチュアル的な要素や非科学的な内容の多いため、心理学書などの学術書とは峻別される」と書いてある。うーむ、「峻別」か。

まあ、私はこの手の本は読まない。そんな簡単に能力向上するなら、誰も苦労しないと思う。もちろん能力向上のための努力はすべきだが、1冊の本を読んで能力向上したりはしない。でも、これらの本は1冊読めば能力向上し、明るい未来が拓くように書いてある。読む人もそれを期待している。そのため誰にでも、何にでも適応できるよう書かれている。つまり普遍的法則というわけだ。

これとは別に「ハウツー本」というジャンルもある。これらは人の能力向上や人生の成功とは関係がない。取り扱いマニュアルと言ってよい。「カーメンテナンスガイドブック」とか「これでわかった確定申告書の書き方」『自分でできる少額訴訟」と言った、最小の努力で何かができる事を目指したものだ。私もこれらの本には結構お世話になる。何も分からず取り組むより、ある程度分かって（理屈の上だけでも）から取り組む方が良いと思う。また、この手の本がないと試行錯誤し、時間がかかってしまう。

本屋に行くと「自己啓発本」のコーナーがあり、結構売れている。その本を見るとなぜか数字が多い。有名な「7つの習慣」から「できる人は○○が9割」「人生は○○で9割決まる」「7つの心得」「99%の○○」なぜか7と9が人気だ。

そしてなぜこのように数字が多いかというと、1冊で何かを成し遂げる事を目指したものだからだ。7つや9つの事で何かが変わればありがたい。もちろん「ハウツー本」も何かをなすためのものだ。しかしハウツー本の目指すものは技術や方法だ。それに対して自己啓発本は人格や思想を目的としている。

いくらぶ厚い本でも1冊で自分が変われるなら安いものだ。これに付随するセミナーに高い金を払って、行ってもよい。しかし残念ながら、これらは全て時間の無駄だ。

それはなぜなのか。以前「7つの習慣」を取り上げたので、スペンサー・ジョンソンの「チーズはどこに消えた」を取り上げてみる。

この本は2000年発行、全世界で2400万部売れたそうだ。「7つの習慣」よりはるかに薄く、読んだ人も多いと思う。出てくるのは2匹のネズミと、2人の小人。この2匹と2人が毎日チーズステーションに通ってチーズをたべている。ある日とうとうそのチーズが尽きてしまう。その後の2匹と2人の行動がストーリーである。

この本の帯には「全米ビジネス書ベストセラー第1位。この物語があなたのビジネスを変える！」と書かれている。いかにもビジネスマンが手に取りそうな本だ。B5の半分B6で、厚さ8ミリ（表紙を入れて）ページの白紙部分は四方それぞれ2センチもある。

開けると1ページを使ってチーズの絵と、そこにスローガンのような言葉が書かれている。その後に童話のような物語が展開する。実に読みやすい。

最初に「チーズを手に入れれば幸せになれる」と書いてある。「7つの習慣」もそうだが、いきなり大前提から始まる。「7つの習慣が重要である」だ。

世の中には「チーズ」つまり物質的富を求めない人もいる。そういう人は読んでもしょうがないのだ。「7つの習慣」を読むのは社会での栄達を求める人だ。そう言うと「金（チーズ）が欲しくない人などいるか」あるいは「出世（社会的成功）したくない人などいるか」と言われそうだ。でも、それは必用かもしれないが、人にはもっと大事なものがあるのではないか。金や地位で買えないものもあるだろう。



そして中を見ると、「新しい方向に進めば新しいチーズが見つかる」・・えーっ方向を変えただけで？「恐怖を乗り越えれば楽な気持になる」・・どうやって乗り越えるの？「新しいチーズがみつかっていなくてもそのチーズを楽しんでいる自分を想像すればそれが実現する」・・まさか！！

まあ、信じる者は救われるという事か。そう思える人はよろしいけれど、私が知りたいのは「どうやってチーズのある場所を知るか」という技術だ。あるいはズバリ、チーズのある場所の地図だ。それを教えてもらわないと金を出す意味はない。しかしそれは全く書いていない。ともかく「変われ！」「前進せよ！」「変化を恐れるな！」「信じよ！」との連呼だ。これでは前号で述べた「計画のない経営計画」と一緒だ。

ともかくこれらの本には論理がない。理屈を言わず実行せよと言うなら、軍隊かブラック企業だ。著者の主張を信じるか、信じないかのどちらかだ。そのためアマゾンなどの評価を読むと、満点か、全く評価しないかどちらかだ。それでは宗教ではないかと言いたくなる。「チーズは」を書いたジョンソンは知らないが、「7つの習慣」を書いたコヴィーは熱心なモルモン教徒だという。総じて「ビジネス教」と言ってもよいだろう。

帯にはアメリカの一流企業が、この本を研修のテキストに使用していると書いてある。

アメリカ人が信心でビジネスをやろうとしている事を、意外に思う人もいると思う。でも少なくてもアメリカ建国時は、世界でも数少ない宗教国家だ。旧大陸で迫害された新教徒が作った国なのだ。今でも大統領は就任時、聖書に手を置いて宣誓するではないか。だからこういう本が受ける。また現代でもアメリカには、アーミッシュを始めとする多数の宗教コミュニティーがあるという。

私は仕事を科学と技術でやろうと思う。信仰はまた別の次元の話ではないだろうか。